

22 移動の痕跡理論に対する移動のコピー理論の優位性

移動のコピー理論 (copy theory of movement) とは、移動 (内的併合) の元位置に移動要素と同一のコピーが残されると主張する理論である。Chomsky (1993) においてこの理論は、移動の元位置に痕跡が残されると主張する **移動の痕跡理論 (trace theory of movement)** の代案として提唱されている。本項目では、移動の痕跡理論より移動のコピー理論の方が理論的にも経験的にも優れていることを説明する。

まず、移動のコピー理論の優位性は**包括性条件 (inclusiveness condition)** によって導かれる。包括性条件とは、統語派生の途中で数え上げ (numeration) に含まれない情報を新たに加えることを禁じる条件である。帰結として、移動の痕跡理論で仮定されていた以下の派生は禁じられる。

(1) a. do you like what → 移動

b. what_i do you like *t_i*

(1b) では、移動の元位置に痕跡 (*t*) が新たに導入されている。しかし、これは数え上げに含まれない情報を新たに加えることになるため包括性条件に抵触する。一方、移動のコピー理論では数え上げに含まれる情報のみを利用しているため包括性条件には違反しない。

(2) a. do you like what → 移動

b. what do you like what

また、移動のコピー理論は内的併合とそれに課せられる**改変禁止条件 (no-tampering condition)** から導かれる。極小主義プログラムの初期まで、構造を構築する統語操作は併合 (Merge) と移動 (Move) の2種類が仮定されていたが、Chomsky (2004) 以降、これらの操作は同じ併合操作の一種と考えられるようになった。この考えのもと、従来の「併合」は、独立に選択あるいは構築された2つの要素を組み合わせる場合の操作であり、外的併合 (external Merge) と呼ばれる。一方、従来の「移動」は、併合が適用される2つの要素のうち一方が他方に含まれる場合の操作であり、内的併合 (internal Merge) と呼ばれる。そして、この併合の適用は改変禁止条件に従うと主張されている。この条件は、言語計算の効率性に基き、併合の過程においてその入力となる要素に変化を加えることを禁じるものである。この帰結として、内的併合の入力となる要素が語彙項目から痕跡へと変化する移動の痕跡理論は棄却され、移動要素のコピーがそのまま残る移動のコピー理論が導かれる。

さらに移動のコピー理論は、極小主義プログラムの枠組みのもと、再構築現象の分析からも支持される。移動の痕跡理論のもとでは、移動要素が移動の元位置で解釈される現象は、再構築 (reconstruction) という操作を仮定して説明されていた。(3) は、移動要素に含まれる再帰代名詞が移動の元位置で束縛される解釈を持つ文である。

(3) Which picture of himself_i does John_i like?

a. S構造: [which picture of himself_i]_j does John_i like t_j

b. LF: [which x] does John_i like [x picture of himself_i]

(3a) のS構造において、移動の元位置には痕跡が生起し、再帰代名詞 himself は先行詞 John から束縛される位置にない。この場合、束縛の解釈を得るには、(3b) のようにLFで痕跡の位置にwh演算子以外の要素を戻す再構築が適用されなければならない。一方、移動のコピー理論ではこの再構築操作を必要とせず、移動の元位置のコピーを解釈することで同様の解釈を得ることができる。

(4) ~~which picture of himself~~ does John like ~~which picture of himself~~

このように、移動のコピー理論は再構築現象の分析を簡潔にするという点で極小主義プログラムに貢献している。

さらに、移動のコピー理論は音韻的にも支持される。移動の痕跡理論では移動の元位置に残る要素が空範疇の痕跡であり、移動要素は必ず移動先で発音されると予測される。一方、移動のコピー理論では移動の元位置に残る要素がコピーであり、移動要素が低い位置で発音される可能性を残している。そして、実際に、移動要素が移動の元位置で発音される例がBošković (2002) やその後の研究で観察されている。

(5) a. Cine *(ce) precede *(ce)? (Romanian)

who what precedes what

‘who precedes what?’

b. Ce *(ce) precede *(ce)?

what what precedes what

‘what precedes what?’

ルーマニア語は複数のwh句が全て文頭で発音される言語であるが、そのwh句が同じ要素である場合、下位のwh句が低い位置で具現化される。この事実は移動のコピー理論の優位性を示している。

(齋藤 章吾)